

## 反復・並列された指示・不定表現の生起環境と用法<sup>1</sup>

前田広幸 (奈良教育大学)

maedah@nara-edu.ac.jp

### 1. はじめに

本発表で分析対象とするのは、(1)(2)に掲げたコソア系列の各種指示語<sup>2</sup>、ド系列その他の各種不定語を含んだ表現が、反復または並列された現代日本語表現である。

#### (1) 指示語

コ・ソ・ア <sup>3</sup>	…	-レ、-コ <sup>4</sup> 、-(ツ)チ(ラ) <sup>5</sup> 、-イツ -ノ、-ンナ --
--------------------	---	--

#### (2) 不定語

ド	…	-レ、-コ、-(ツ)チ(ラ)、-イツ -ノ、-ンナ --
---	---	------------------------------------

ダレ、ナニ、イツ<sup>6</sup>

<sup>1</sup> 本発表の付に掲げる用例収集結果の源になっているのは、周毅(2008)「反復・並列された指示・不定表現の日中対照研究」(奈良教育大学大学院教育学研究科修士論文)中の日本語に関する研究成果である。ここにそのことを記し、本発表のおおもととなる部分が、現在中国に帰国し日本語教育にたずさわっている周毅氏によるものであることを明記しておきたい。なお本発表と一部重なる内容を、2007年10月13日の音声文法研究会、および2008年2月17日の特定領域研究「日本語コーパス」日本語学班研究会にて行った席上でご意見を賜った諸氏にも感謝の意を表したい。

<sup>2</sup> 本発表で指示語、不定語という場合、(1)(2)に掲げた構成と語形を持つ(と考えられる)語全般をさして、品詞論的にはいわゆる名詞・連体詞・副詞相当のものに加え、感動詞に転成したものも含めている。したがって、命名の元になっている<指示>や<不定>という働きから外れる働きでの使用も含め、分析対象としている。

<sup>3</sup> コ・ソ・ア系列以外に、カ・シカ・サ系列の指示語が現代日本語の中にも部分的に残って使用されているが、それらについては、本発表では主な考察対象とはしない。またコ・ソ・ア・ドに-ナタが後接した表現やイクラ、イクツ等々、(1)(2)にかかげていないその他の関連語についても本発表では、考察対象としていない。

<sup>4</sup> ア系指示語基に-コが続いた場合には通常、「あそこ」という形が用いられる。

<sup>5</sup> 促音挿入とラ付加の両方を行った、「\*こっちら」のような形は用いられない。

<sup>6</sup> ナゼは後述の reduplication や dvandva 語形成には参画せずここには掲載していない。また、ナンデ、ナニユエ、ドーシテ、ドノヨーナ、ドューフーニ等々、複雑形不定表現もあるが、コ・ソ・ア系の複雑形指示表現同様、(1)(2)中には掲げていない。

本発表では、「これこれ」「いついつ」「どこそこ」「あちこち」「そんなこんな」等々、指示語・不定語のどのような組み合わせがどのような用法で用いられるかに主な関心をもって用例を集め考察した内容をもとに、以下の(3)～(5)のような点を中心に報告を行う。

- (3) 単独でそのような用法が不可能であった場合でも、一部のコ系指示語の重複、不定語の重複、不定語と指示語の並列複合で、〈プレースホルダー〉用法が可能となる。
- (4) 一部のソ|ア系指示語とコ系指示語との並列複合では、単独でそのような用法が不可能であった〈いろいろ〉用法が可能となる。また〈いろいろ〉用法は、不定語を含む句の句レベルでの並列においても可能な場合がある。
- (5) 重複(重畳; reduplication)、並列複合(并列复合; dvandva)による語形成を行った場合、当該複雑語のアクセントは、構成素となるもとの語のアクセントをただ“接合”(秋永 2001) だけでなくないものとなることが多い。この点、句レベルでの繰り返し(repetition)<sup>7</sup> の場合とは異なっている。

## 2. 反復・並列された指示・不定表現の組み合わせと意味

- ・ 単純な反復・並列…指示語・不定語だけ(からなる句)が反復・並列されている  
(「これこれ」「あれこれ」「どーこー」等々)
- ・ 複雑な反復・並列…指示語・不定語以外の要素も含む句が反復・並列されている  
(「あれやあれや」「あれもこれも」「どーのこーの」等々)

{指示・不定表現に限らない、語句の反復・並列の意味から説明すべきもの}

[反復] (6) 「どれが君の? これ?」－「それ(です) (それ (です))。』

(7) 「昔々あるところにそれは(それは) きれいなお姫さまがありました。」

(8) 「どれ(どれ)、私に見せてごらん。」－「さて(さて)、君にわかるかな?」

(9) 「こんなうまい酸辣湯は日本ではそう(そう)ないね。」－「そう(そう)!」等々

cf. 「どっちもどっちだよ」「あいつはあいつ。俺は俺」

[並列] (10) 「あれもこれも試してみたい」等

(11) 「あっちを見たり、こっちを見たり)」等

cf. 「何もかもいやになった」等

{指示・不定語の反復・並列に関し、ここで注目する意味}

[反復]

〈プレースホルダー〉<sup>8</sup>

<sup>7</sup> そのような場合“弱化”(郡 1997)はあるにせよ原則各構成語のアクセントは保存されている。

<sup>8</sup> 〈プレースホルダー〉という用語は、熊丸令(2005)「日本語の不定語・重ね不定語の特性と複文の分析」(九州大学大学院文学研究科修士論文) によっている。

(12) 「次郎はどこ(どこ)に集合するように、とみんなに連絡した」等

(13) 法というものは、これこれのことをすれば罰するぞとあって、そういう行為を禁じる法規があって、はじめて存在するのだ。(スタンダー(原著); 小林正(訳)「赤と黒」)

<その他>

(14) a. 「食事もそこそこに出かけた」 b. 「彼はそこそこ頭の切れる奴だ」

c. 「彼女はまだはたちそこそこに見える」等

[並列]

<いろいろ>

(15) 情報を前にしてその対策につきあれこれ考えをめぐらしていると…

(島尾敏雄「島の果て」)

<プレースホルダー>

(16) 誰かがやって来て、『どこが釣れますか?』と聞くと、どこ(そこ)へいけという。

(庄野潤三「静物」)

(1) (2)の指示語・不定語の reduplication や dvandva による語形成について、どの組み合わせがどの意味で使用可能か、かりに二種の辞書(『日本国語大辞典』『学研国語大辞典』)に共通して掲げられていた項目をチェックすると、以下の表の通り。

△<いろいろ> ○<プレースホルダー> ◇<その他> a『日本国語大辞典』 b『学研国語大辞典』<sup>9</sup>

事物	これ	それ	あれ	どれ
これ	○ab			
それ		(◇ab <sup>10</sup> )		
あれ	△ab			
どれ				

場所	ここ	そこ	あそこ	どこ
ここ				
そこ	△ab	◇ab		
あそこ				
どこ		○ab		○ab

方向	こっち	そっち	あっち	どっち
こっち				
そっち	△ab			
あっち	△ab			
どっち				

方向	こちら	そちら	あちら	どちら
こちら				
そちら				
あちら	△ab			
どちら				

<sup>9</sup> △、○、◇の記号により、二つの辞書で共通して記述されていた意味がどの意味であることを示している。また ab と書くことにより、その記述が二つの辞書で共通して記述されていたものであることを示そうとしている。

<sup>10</sup> 「それぞれ」(後部反復形で連濁が生じている)に関する辞書記述。

性状	こな	そん	あんな	どんな
こな				
そん	△ab			
あんな				
どんな				

様子	こう	そう	ああ	どう
こう	○ab			
そう	△ab			
ああ				
どう	△ab			

上の表に含まれてない、不定と不定、不定と指示の組み合わせも見られた。そのような組み合わせは次のものであった。

○<sup>a</sup>◇<sup>b</sup>なになに、○<sup>a</sup>◇<sup>b</sup>だれだれ、○<sup>b</sup>だれそれ、○<sup>b</sup>いついつ

※なお、並列順序に関しては、大きく分け、遠近順のような意味的説明と

拍数、音韻階層にもとづく音韻的説明とがこれまで提案されてきている。

→しかしどの dvandva が可能かは語彙的指定が必要 (reduplication についても同様)

・例えば「あ(っ)ちこ(っ)ち」「あちらこちら」「そ(っ)ちこ(っ)ち」「\*そちらこちら」等

・また、モをはさんだ並列と単純並列の間での可否の異同についても参照。

どれもこれも                      \*どれこれ  
 どいつもこいつも                \*どいつこいつ  
 \*どっちもこっちも                \*どっちこっち

あれもこれも                      あれこれ  
 あいつもこいつも                \*あいつこいつ  
 あっちもこっちも                あっちこっち

### 3. 指示語・不定語のアクセントとそれらの反復・並列表現のアクセント

(1)(2)に掲げた指示語のアクセントは、秋永(2001)中のアクセント習得法則においても述べられている通り、平板型が多く(ーツチ類は尾高、一部のー類(／\_\_ハ行カナイ, \_\_ダ)は頭高; なお感動詞に転換した場合、-ノ類を除き多くの語が頭高)、また不定語のアクセントは原則として頭高型(ただし(イ' ツモは別にして)モの後接した全面否定用法での平板化則あり)である。

- (17)a. 平板：(指示) コレ<sup>~</sup>, ソレ<sup>~</sup>, アレ<sup>~</sup>; ココ<sup>~</sup>, ソコ<sup>~</sup>, アソコ<sup>~</sup>; コチラ<sup>~</sup>, ソチラ<sup>~</sup>, アチラ<sup>~</sup>; コイツ<sup>~</sup>, ソイツ<sup>~</sup>, アイツ<sup>~</sup>; コノ<sup>~</sup>, ソノ<sup>~</sup>, アノ<sup>~</sup>\*<sup>11</sup>; コンナ<sup>~</sup>, ソンナ<sup>~</sup>, アンナ<sup>~</sup>  
 (感動詞) ソノ (/\_何デスヨ, 実ハ\_),  
 (/\_言ウ, \_シテ) コー, ソー, アー
- b. 尾高：(指示) コッチ'
- c. 頭高：(/\_ハ行カナイ, \_ダ) コ'ー, ソ'ー, ア'ー
- d. 頭高：(感動詞) コ'レ (/\_坊ヤ), ソ'レ (/\_来タ, \_見ロ), ア'レ (〜アレ'), ア'ー (/\_驚イタ)
- (18)a. 頭高：(疑問) ド'レ\*, ド'コ, ド'チラ, ド'ッチ, ド'イツ, ド'ノ, ド'ンナ, ド'ー, ダ'レ, ナ'ニ<sup>12</sup>, イ'ツ
- b. 平板化：(全部否定) ダレモ<sup>~</sup> (〜ダ'レモ) 等, ドッチミチ<sup>~</sup> (/\_ダメダ)

(19) 秋永(2001)における関連語のアクセント記述

コレ' コレ

コ'ー コー

ド' コドコ, ド' コソコ,

ダ' レダレ, ダ' レソレ, ナ' ニナニ (〜ナニ' ナニ, ナニナニ<sup>~</sup>),

(感動詞) ド' レドレ, ナ' ニナニ (=何事か),

アレ' コレ,

ソコ' ココ

ソッチ' コッチ; ソチ' コチ〜ソチコ' チ

アッチ' コッチ〜アッチコ' ッチ; アチラコ' チラ〜アチラコチラ<sup>~</sup>; アチ' コチ〜アチコ' チ

ソンナコンナ' (/\_デ)

ソ'ー コー

ド'ー コー (/\_言ウ)

(ソレ' ズレ〜ソレゾ' レ)

ソ'ーソー (/\_良イ顔モデキナイ)

ソコソコ<sup>~</sup> (/\_百円\_, 挨拶モ\_ニ)

<sup>11</sup> (17)(18)中での\*記号は、秋永(2001)には特に立項されていないが、その指示語/不定語が記載したアクセントのまま感動詞として転成した使い方が可能と思われることを表示している。

<sup>12</sup> あの物・あの人の意では平板。ナニ<sup>~</sup> (/\_ヲ取ッテクレ)。また、感動詞としてのナニオ'は尾高。

## 5. 指示語・不定語の単独使用と組み合わせ語使用との後方文脈の偏りの差

※「こうこう」の繰り返しのパターンとし「こうこう、こういう～」というパターンあり

※「ok コレ{が | を | に | …}」「(?) コレの[名詞]」

「(?) コレコレ{が | を | に | …}」「ok コレコレの[名詞]」という違いあり

## 参考文献

- 秋永一枝(編) 2001 『新明解日本語アクセント辞典』 三省堂 (金田一春彦(監修)『明解日本語アクセント辞典』(第2版, 1981刊)の改題改訂版)
- 岡崎友子 2006 「感動詞・曖昧指示表現・否定対極表現について: ソ系(ソ・サ系列)指示詞再考」 『日本語の研究』 2-2:77-91
- 金 善美 2006 『韓国語と日本語の指示詞の直示用法と非直示用法』 風間書房
- 金水敏・岡崎友子・曹美庚 2002 「指示詞の歴史的・対照言語学研究 一日本語・韓国語・トルコ語一」 生越直樹(編)『シリーズ言語科学 4 対照言語学』 pp. 217-247 東京大学出版会
- 金水敏・田窪行則(編) 1992 『日本語研究資料集 指示詞』(2004:2刷) ひつじ書房
- 熊丸 令 2005 「日本語の不定語・重ね不定語の特性と複文の分析」 九州大学大学院文学研究科修士論文
- 呉人恵・芦英順・加藤重広 2005 「指示詞の照応用法に関する日本語と中国語の対照研究」 『富山大学人文学部紀要』
- 郡 史郎 1997 「「当時の村山首相」の2つの意味と2つの読み 一名詞句の意味構造とアクセント弱化について一」 音声文法研究会(編)『文法と音声』 pp. 123-146 くろしお出版
- 佐久間鼎 1966 『現代日本語の表現と語法 (増補版)』 恒星社厚生閣 (1983 くろしお出版より復刊)
- 早田輝洋 1977 「対語の音韻階層 なぜ「こっちあっち」と言わないか」 『文化研究 (九州大学)』 74
- 堀口和吉 1982 「不定称」「指示代名詞」「指示語」 日本語教育学会(編)『日本語教育事典』 大修館書店
- 益岡隆志・田窪行則 1992 『基礎日本語文法 (改訂版)』 くろしお出版
- 三上 章 1970 「コソアド抄」『文法小論集』 pp. 145~154 くろしお出版
- 李 宇明 2002 「论词语重叠的意义」『语法研究录』、北京:商务印书馆、79-98 (原载《世界汉语教学》, 1996 (1): 10-19)
- 李 長波 2002 『日本語指示体系の歴史』 京都大学学術出版会

盧 濤 2004 「指示詞の複合とその周辺」 影山太郎・岸本秀樹(編)『日本語の分析と言語類形：柴谷方良教授還暦記念論文集』pp. 93-108 くろしお出版

#### 補 「重複（あるいは重畳）」(reduplication) 研究について

中国語における reduplication (重畳) については、李宇明(2002) において以下のような観点からの下位区分が立てられているが、それは、reduplication の研究において一般に取り扱われる主な分析な観点をあげたものと考えることができる。

- 1) 重畳成分の品詞性 (名詞、形容詞、動詞、擬音語など)
- 2) 重畳成分の自立性・句性 (非自立形態素、自立語、句など)
- 3) 重畳成分の音韻構造 (単音節成分、2音節成分など)
- 4) 重畳のパターン (AA、ABB、AABB、ABABなど)
- 5) 重畳の次数 (XX、XXXなど)
- 6) 重畳によりあらわれされる意味 (複数性 (多数性)、程度強調、反復性など)

それをふまえていうと、本発表では指示語と不定語に着目し、それらの2次の重複および並列複合に関し、意味とアクセント、構文機能を中心に、単独形の用いられ方との共通点、相違点について、日本語の例を分析した研究であったといえる。